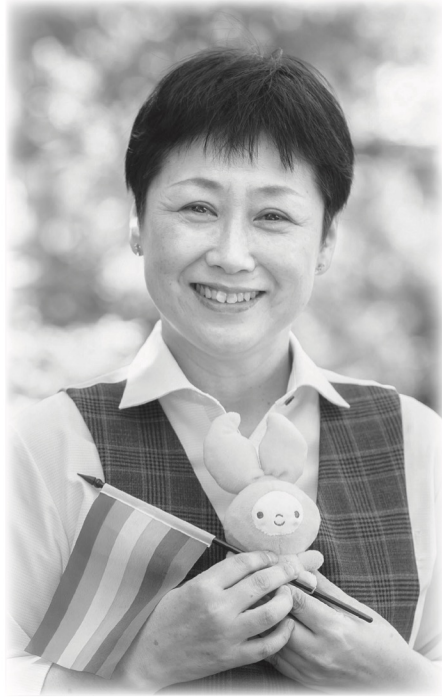


さいたまここに人あり

ジェンダー平等、多様性を大事に 人権を実感として学ぶ教育を



埼玉大学 副学長
ダイバーシティ推進・キャンパス環境改善担当

たしろ みえこ
田代 美江子さん

プロフィール 埼玉大学教育学部教授。社団法人「人間と性」教育研究協議会代表幹事。『季刊セクシュアリティ』編集長。専門分野はジェンダー教育学。特に、近現代日本における性教育の歴史、ジェンダー！セクシュアリティ平等と教育をめぐる諸問題が主な研究テーマ。公立中学校をフィールドに、『国際セクシュアリティ教育ガイドランス』を踏まえた「性の学習」の実践づくりに教員と協働で取り組んでいる。またオーストラリア、中国、韓国、台湾など東アジアにおける性教育の実態を調査している。主な編著書は、『改訂版』国際セクシュアリティ教育ガイドランス（ユネスコ編、共訳、明石書店、2020）『教科書にみる世界の性教育』（編著、かもがわ出版、2018）『ハタチまでに知っておきたい性のこと』（編著、大月書店、2014）『こんなに違う！世界の性教育』（共著、メディアアファクトリー、2011）『新版人間の性と教育①性教育のあり方、展望 日本と世界、つながりひろがる』（編著、大月書店、2006年）など。

新型コロナウイルスで 大学は…

新型コロナウイルスの感染拡大に対して、埼玉大学は昨年4月の段階でオンラインで授業をおこなうことを決めて、5月の連休前にははじめることになりました。自宅にインターネット環境やパソコンがない学生への支援も連休中をつかっすすめることができました。1年生に対しては、担任など各学部、学科で電話をするなど、きめ細やかな対応をしています。学生同士がオンライン上で集まることのできる場もつくりました。

体育や実験など、対面授業もいくつかあります。飲食をしないことを条件に、学生の課外活動も認めています。学生がいつまでも大学に来れないのは気の毒で

す。大学に来られる状況を感染防止をし
ながらどうつくっていくのが課題です。

私は昨年4月に副学長になりました。
ダイバーシティ推進、キャンパス環境改
善担当をしています。今回、大学の職員
も感染防止で在宅ワークをとり入れまし
た。この在宅ワークに関する調査をおこ
なうなかで、子育てや家事などの課題に
についても調べています。こうしたこと
今後の勤務のなかでもいかしていくこと
が大事だと思っています。

自分がやりたいこと を大切に

私は大学の教員になることはまったく
考えていませんでした。自分のやりたい
ことを大切にしてきた結果だと思ってい
ます。もともと、小学校高学年くらいか
ら「女に生まれて損したかな」というモ
ヤとした気持ちを持っていたのです
が、埼玉大学に入学して女性論ゼミとい
う社会思想史のゼミに参加したことがき
っかけで社会科学、教育学そのものに興
味を持つようになりました。その当時は
まだ「ジェンダー」という言葉も使われ

ていませんでした。女性論を学ぶなかで、
ほんやりしていた生きづらさの原因がク
リアになっていきまし、
「好きに生
きていいんだ」と思うようになりました。

こうした学問が刺激的でおもしろかつ
たので、大学卒業後、もつと教育学を学
びたいと思いました。当時は埼玉大学に
大学院がありませんでしたので、教育専
攻科に入って学ぶことにしました。この
とき指導していただいた先生に大学院に
行くことをすすめられました。その後、
大学院の受験を考えたときに、当時私が
やりたかった「男女平等教育」を研究し
ていた先生はほとんどいませんでした。
「男女平等教育は研究ではなく運動だ」
と言われたこともあります。そのなかで
日本女子大学の大学院を受験し、入学し
ました。そのときも大学の教員を目指し
ていたわけではありません。勉強を続け
ることが目的でした。大学院では近世の
教育史の先生や女性史の先生と出会った
ことで、男女平等と性教育の歴史につい
て学ぶことにしました。研究をすすめて
いくなかで、性教育論が出てくると同
じ時代に産児調節運動や廢娼運動といっ
た性に関わる運動が展開されていたこと
がわかりました。そのなかで性が教育的

にどう語られていたのかを含めて、「近
代日本における性教育」をテーマに修士
論文を書きました。その後、この内容を
ていねいに細かく研究していくことや、
戦中、戦後、最近まで含めての性教育に
ついて研究することがライフワークにな
りました。

「包括的性教育」の中 の「人間関係」

「ジェンダー平等」を「女性の問題」
と知っている人が多いのですが、それは
違くと、大学で学んでいるときから思っ
ていました。男性も「男らしさ」に縛ら
れていることを考えれば、男性の問題で
もあるんです。2002年以降、性教育
と同時にジェンダーへのバッシングがあ
りましたので、後退している面もありま
すが、いまはジェンダー平等が男女両方
の問題だということと同時に、性の多様
性を前提とする、あらゆる性の平等を考
える段階にきています。

学校教育では、2015年に性同一性
障害にかかわる子どもへの配慮を求める
通知が、16年には教職員用の解説書が文



国際セクシュアリティ教育ガイダンス
—科学的根拠に基づいたアプローチ (改訂版)

科省から出されました。これは大きな意味があったことだと思います。性の多様性に関する教職員向けの研修もこの数年で充実してきています。一方で、性教育を抑制する学習指導要領の「はじめ規定」はあいかわらずです。道徳が教科化されたように、教育の反動的で保守的な動きも確実にすすんでいます。

ユネスコが出している「国際セクシュアリティ教育ガイダンス」を私を含めた数人で翻訳しています。このガイダンスは、世界中で「包括的性教育」にとりくむことを推奨しています。「包括的性教育」において、「人間関係」は重要な学びの課題です。性教育は、人間が知識や情報をふまえて幸せに生きるための自己選択ができるようにする教育です。社会に溢れる差別的で暴力的な情報を読み解き、自分にとって安全な選択ができる力

をつけていくのが「包括的性教育」なんです。

ガイダンスの「人間関係」の項目は、「家族にはいろいろな家族がある」ということから始まっていて、「家族は協力できないこともある」「ジェンダーの問題もある」と書かれています。道徳の学習指導要領には家族について「父母、祖父母、子ども」とあります。友だちについても、道徳では「信頼」や「助け合い」が前提となっていますが、ガイダンスでは「友だちとは何か」ということから始まっています。こうした比較も大学の授業でしています。

「人権」「権利」を 感でできる教育が必要

コロナ感染が広がるなか、多くの女性が働く医療や福祉の現場は大変な状況に置かれています。母子家庭の多くも、さらなる貧困に陥っています。政治経済分野での女性の比率の少なさは、女性が生きやすい社会にならないことにつながっています。女性が生きやすいということとは、誰にとっても生きやすいこと

いうことです。「女性活躍」といいますが、これは家庭内で無償で子育てや介護をする女性や非正規雇用の低賃金で働く女性と、一部の活躍できる女性とを分断する政策でしかないと思っています。

社会のなかでケア（＝誰かの助け）を受けないで生きている人間は一人もいません。どんな人も誰かに育てられていて、誰かのお世話になっています。ケアは人間が生きるなかで必須の条件で、そこを中心に社会を組み立てていくことが重要です。全ての人が誰かに依存しながら生きていくことを前提にして、ケア労働を担う人を大事にする社会にしたいかないと、誰もが大切にされる社会にはなりません。新自由主義的な世界での動きはこれに逆行していますし、自己責任論はその典型的な考え方です。新型コロナウイルス拡大のなかで医療従事者や貧困層にそのしわ寄せがきていることは、ケアをおろそかにしてきた日本社会の当然の帰結です。

「人権」や「権利」は、たとえ言葉で説明できたとしても「人権を大切にしたら」「権利を行使した」という経験がなければ、本当にそれらを理解することはできません。常に権利侵害されて

いる状況に慣れてしまつて気付かないでいると、子どもたちの人権を踏みにする大人になつてしまうから、だから今、子どもの権利について学ぼうと学生に言います。ジェンダー平等や多様性を前提にして、人権を実感として学ぶ教育を学校教育で実現させていくことが必要です。こういったことが学べるのが「包括的性教育」だと思っています。

みんなが多様だとい うことを学ぶ

私は足立区の中学校で先生たちといっしょに人権教育としての性教育の実践づくりにとりこんでいます。経済的に困窮した家庭や、母子家庭、外国人の生徒や児童養護施設から通っている生徒などがある学校です。3年間の「性の学習」のプログラムは「生命誕生」からはじまります。小学校高学年で学ぶ生命誕生の授業では、「母親への感謝」につなげられていることがほとんどです。虐待を受けた子どもやステップファミリーが多い環境で「お母さん産んでくれてありがとう」という授業はありえないんです。だから、

「生命誕生」を科学的に学ぶ授業をしています。

このプログラムの中の「避妊、中絶」が学習指導要項になかったためにバツシングを受けたのですが、先生たちは、生徒が自分の体を守るため、幸せに生きるために避妊や中絶、デートDVなどを学んでほしいと思つているんです。こういった授業をすることで、「子どもたちがやさしくなる」と校長先生は言つていますが、授業の効果を現場の先生方も感じているようです。新任の先生から「性教育をやりたい」という声があがるなどの広がりもあります。

問題が多い学校だと、生徒を怒鳴つたり高圧的にコントロールすることがありますが、人権教育を大切にしてこの学校ではそういうやり方をしません。「人権を大事に」と言いながら子どもを怒鳴つていたらなんの意味もありません。それでは子どもがホンネとタテマエを学ぶだけです。

人権と同じように多様性の学びもとても難しいと思つています。私たちは「LGBT」や「セクシュアルマイノリティ」という言葉はほとんど使いません。カテゴリー化するのではなく、「みんなが多

様だ」ということをどう学ぶのが大事です。「性の多様性」を学んでも、たいていの子どもは「これから差別しないようにしたい」とか「好きなように生きられるのがいいと思う」というように「ひとごと」です。そうではなくて「自分ごと」として受け止められるようにすることを目指しています。「男らしくない男の子」をいじめる社会を、異性愛でない人たちが生きにくい社会を、自分たちも支えているということはどう学ぶのかということです。ステレオタイプのな容姿からはずれたひとのことを子どもがバカにしたとき、「バカにしてはいけない」ではなく、「なぜバカにしてしまうのか」「なぜその容姿がよいと思つてしまうのか」といったような社会的なところまで追求して学べると思います。

社会のおかしいと思うところを、教員が子どもとともに考えることが大事だと思つています。学校のジェンダー問題はどこにあるかということ、教員もいっしょに考えてとりこんでいく経験は、子どもにとつて重要です。学校は子どもにとつての社会です。子どもに「社会を変えられる」という体験をもらうことが必要です。